

人の地域移動の日常性をめぐる 民俗学史的考察

An Analysis of the History of Folklore Studies
on the Ordinarity of Inter-regional People Movements

松田睦彦

MATSUDA Mutsuhiko

はじめに

①人の移動が周縁化された民俗学の現状

②柳田農政学と人の移動

③人の移動を見失うふたつの画期

おわりに

【論文要旨】

小稿は人の日常的な地域移動とその生活文化への影響を扱うことが困難な民俗学の現状をふまえ、その原因を学史のなかに探り、検討することによって、今後、人の移動を民俗学の研究の組上に載せるための足掛かりを模索することを目的とする。

1930年代に柳田国男によって体系化が図られた民俗学は、農政学的な課題を継承したものであった。柳田の農業政策の重要な課題の一つは中農の養成である。しかし、中農を増やすためには余剰となる農村労働力の再配置が必要となる。そこで重要となったのが「労力配賦の問題」である。これは農村の余剰労働力の適正な配置をめざすものであり、柳田の農業政策の主要課題に位置づけられる。こうした「労力配賦の問題」は、人の移動のもたらす農村生活への影響についての考察という形に変化しながら、民俗学へと吸収される。柳田は社会変動の要因として人の移動を位置づけ、生活変化の様相を明らかにしようとしたのである。

しかし、柳田の没後、1970年代から1980年代にかけて、柳田の民俗学は批判の対象となる。その過程で人の移動は「非常民」「非農民」の問題へと縮小される。一方で、伝承母体としての一定の地域存在を前提とする個別分析法の隆盛により、人の移動は民俗学の視野の外へと追いやられることになった。人の日常的な移動を見ることが困難な民俗学の現況はここに由来する。

今後、民俗学が人びとの地域移動が日常化した現代社会とより正面から向きあうためには、こうした学史的経緯を再確認し、人びとが移動するという事象そのものを視野の内に取り戻す必要がある。

【キーワード】 柳田国男、労力配賦の問題、非農民、漂泊民、個別分析法

はじめに

小稿は人の日常的な地域移動とその生活文化への影響を扱うことが困難な民俗学の現状をふまえ、その原因を学史のなかに探り、検討することによって、今後、人の移動を民俗学の研究の俎上に載せるための足掛かりを模索するものである。

近現代の日本における人の地域移動を扱う学問分野を問われて何を思い浮かべるであろうか。おそらく、高度経済成長期の農村から都市への挙家離村や出稼ぎといった社会問題を扱う経済史学や社会学、戦前から戦中そして戦後に行なわれた日本から海外（あるいは植民地）への移民や海外から日本への移民などを扱う歴史学や文化人類学などがまずは頭に浮かぶであろう。しかし、そこに民俗学の名は出てこない。その原因を問うのが小稿の目的である。

現代社会において人が移動するという事は決して特別な現象ではない。国立社会保障・人口問題研究所の全国調査によれば、1996年時点における全年齢での平均転居回数は男性が3.21回、女性が3.03回である。また、一生のうちに転居を経験する人の割合は男性が73.9%、女性が82.2%である。生涯の平均転居回数は当然のことながら年齢が上がれば高くなる。これらの数値には若年層が含まれており、人が一生のうちに転居する回数の平均や転居を経験する人の割合がこれを上回ることは明らかである〔井上孝2001〕。これらの数値に就学による一時的な転居や近距離での転居、あるいは結婚による転居が含まれていることを勘案したとしても、人の移動を視野の外においた、あるいは特別視した民俗学が存立不可能であることは明らかである。

そこで小稿では、人の移動が周縁化された民俗学の現状をふまえたうえで、民俗学の成立以前、柳田国男が農政学を基盤として活躍した時代から時系列に沿って、人の日常的な移動が次第に研究の周縁部へと追いやられる過程を明らかにする。具体的にはまず、人の移動が主要な課題であった柳田の主張する農業政策について考察する。つぎに、柳田の農業政策における人の移動に対する視線がどのように民俗学へと反映されたのかを確認し、最後に柳田没後の民俗学において人の移動が特殊視されるようになる経緯を明らかにする。

こうした作業は、人の移動を対象とすることの困難な現在の民俗学がいかんして成立したのか、学史的経緯を整理・理解することで方法的課題を確認し、今後の研究に資することを目的とするものである。

①……………人の移動が周縁化された民俗学の現状

民俗学における移動研究が低調である、という考え方には多くの異論があるかもしれない。たしかに、柳田国男による山人研究を嚆矢として、瞽女や座頭、万歳、春駒といった宗教者や芸能者、木地屋やマタギ、タタラといった諸職にたずさわる人びと、そして行商人など、定住地を定めずに、あるいは定住地がありながらも、漂泊や移住、出稼ぎなどをしながら生計を立ててきた人びとは、古くから民俗学にとっての重要な研究対象であった。また、家船の漂泊的な生活や漁民の出稼ぎ、その帰結としての国内外への移住などの研究についてもその厚みを認めないわけにはいかない。

しかし、このような人の移動に対する民俗学的関心を振り返ったときに、何か違和感を覚えないであろうか。筆者が覚える違和感とは、そこに「普通の人びと」⁽¹⁾の日常へのまなざしが感じられないということである。

こうした違和感の背景には、人が移動することに対する二重に構築された排除の構造を読み取ることができる。

まず、従来の研究では移動することを必要条件とする生業、あるいはそれに従事する人びとが特異な事例として取りあげられてきた。それは、「常民」に対する「非常民」、「農民」に対する「非農民」、「定住民」に対する「漂泊民」といった二項対立的な図式に象徴的に表れている。人びとの常態をおもな研究対象とする民俗学において、人の移動は非常態としての後者に位置づけられてきたのである。

一方、「定住民」に対する「漂泊民」という二項対立にもあるように、人が移動するということを「漂泊」という狭い枠組みに押し込めようとする研究状況も問題である。果して「定住」の対義語は「漂泊」であろうか。この二項対立からもれる人びとの営みはあまりにも多すぎる。

ここで見落とされているものとは何か。それは「常民」による移動であり、「農民」による移動であり、「定住民」による移動である。

もちろん、従来の研究においてもこれらの属性に分類される人びとの移動は取りあげられてきた。たとえば宮本常一は、あくまでも「出稼ぎ」という限定された現象についてではあるが、これを「生産領域と生活領域に大きいずれを生じたときおこる現象」と位置づけたうえで、移動することを前提とする生業に関するものと、兼業として行なうものとの二つに分類し、前者の例として専業漁業者や仙人を、後者の例として農業従事者による捕鯨や兼業漁業者による定置網漁、封建都市や土木工事場への農間出稼ぎをあげている〔宮本 1958 : 207-222〕。筆者が注目したいのはまさしく後者であり、移動することを常態とする彼らの日常である。

しかし、宮本以降、こうした視点に立った研究は限られている。すなわち、定住を基本とする人びとが日常的に行なってきた地域移動、たとえば社会問題とは異なり通常の生業戦略に組み込まれてきた出稼ぎや、若者による都市での就労、あるいは会社勤めをする人の転勤などへの配慮が充分に行なわれないまま研究が進められてきたのである。否むしろ、定住者とは異なる特殊な生活であり、そこに独特の民俗を見出すことができたからこそ研究対象としての価値を認められてきたのかもしれない。

このように、民俗学が日常的な人びとの移動を描くことができない理由について浅井易はつぎの3点を指摘する。すなわち①変わりにくい事象を扱う傾向にある民俗学には近代はとらえにくかった、②近代の人の移動は国民国家内または国民国家間の大規模な労働力の移動として扱われたため、経済学的な説明が有効とみなされた、③空間的に境界づけを行なったうえでの研究が、村落からの人の出入りを視野の外におきがちであった、というものである〔浅井 1999 : 108-138〕。①の指摘については、民俗学が本来民俗の歴史の変遷を扱う学問であるとする立場からは受け入れがたいが、従来の民俗学にそうした傾向があったことは認めざるを得ない。一方、②および③については少々具体的な検討が必要であろう。

まず、②については、人の移動の研究とは移民や出稼ぎといった社会的に大きなインパクトを与え

る現象の研究であるとする隣接諸科学に多く見られる発想にもとづいた分析枠組みに対し、民俗学の側が一定の距離をとったことが原因であると考えられる。しかし、人の移動のすべてが非日常的で特殊な事象であるとする考え方が誤りであることは、フィールドに向き合った経験がある研究者であればすぐに分かることであり、民俗学独自の発想にもとづいた分析枠組みの設定が必要であった。また、民俗学の成立に大きな役割を果たした農政学においては、社会問題としての人の移動、すなわち農村と都市との人口移動は中心的な課題であり、柳田国男が志向する農業政策においても重要な位置を占めていた。さらに、こうした農政学的な人の移動に対する視線が初期の民俗学に吸収されていったはずである。

つぎに、③については、現在の民俗学において、福田アジオが提唱した伝承母体を基礎とする個別分析法が方法論上強い影響力をもっていることの表れであろう。福田は、全国の民俗を比較することで歴史の変遷を明らかにしようとする、柳田の提唱したいわゆる重出立証法に対して、一定の土地を占有する社会組織を不変の伝承母体とし、そのなかにおける民俗の有機的連関を重視しながら歴史的世界を再構成しようとする個別分析法を提唱した。この個別分析法が空間を境界づけることを前提としたがゆえに、その境界を出入りする人びとをとらえきれなかったとする浅井の指摘は正鵠を得ている。

②③ともに現在の民俗学にとって克服すべき課題である。

以上述べてきたように、従来の研究では、本来人は定住生活を送ることが常態であり、移動するということは歴史的にも現代的にも何か特別な文化的、経済的、社会的事情のもとで発現する特殊な状態としてとらえられてきた。しかし、民俗学が歴史的帰結としての現在に表れる日常の観察をとおして、過去から現在へといたる生活の変遷を、とくに生活観念に注目しながら明らかにしようとする学問であるとするならば、そうした特殊な生業に従事する人びとに関する研究とともに、「普通の人びと」が普通の生活を送るうえで、日常の生活圏の外へと移動することをいかに取り入れてきたのか、そしてその移動がどのような影響を彼らの生活に与えてきたのか、といった問題についても積極的に議論されるべきであろう。つまり、移動を内包した日常を描くことが求められるのである。

しかし、そのためには民俗学という研究分野の歴史のなかで、人の移動がどのように扱われてきたのか、そしてどのような経緯を経て「普通の人びと」の日常的な移動が研究の狭間へと埋没していったのかをあらためて解きほぐしておく必要がある。

②……………柳田農政学と人の移動

1. 「労力配賦の問題」としての人の移動

柳田の確立した民俗学が農政学の延長に位置づけられるということについては先学の指摘にあるとおりである。大正中期以降、柳田は「自立的で健全な国民国家の形成というかつての農政論段階で自ら構想したヴィジョンを真に実現するには、農政論的な手法ではフォローしきれないような問題状況が生じていることを自覚し、そこから農政論＝生産論レベルに関連する問題だけでなく、

消費のあり方、それを規定する生活のあり方、生活様式の問題、地域生活やそこでのさまざまなレベルでの共同性の問題、さらには農村伝来の教育方法、地域的コミュニケーションおよび世代的伝達の方法としての言語＝方言、信仰、内面的な価値意識、内面化された倫理規範等、農民生活、農村生活をトータルにその全体的構造を問題とする」必要を認識し、「そのための新しい社会認識の方法、農村の生産と消費を含めた生活全体、それを規定する意識・思考等、わが国農民生活の総体把握を可能にするような学問方法」にたどり着いたのである〔川田 1985: 251〕。つまり、柳田の農政思想の実践的な展開として民俗学が成立したと考えることができよう〔松田 2010b: 151〕。

柳田が農業政策に関する議論を積極的に展開するようになるのは 1900 年に農商務省に入省して以降のことである。

柳田の農政思想における人の地域移動への関心は「労力配賦の問題」というキーワードから読み解くことができる。「労力配賦の問題」とは、農村における余剰労働力をいかに適切に農業以外の労働へと配置するかという問題であり、地域内での転業がかなわなければ当然のことながら地域移動をとまなうことになる。柳田の構想する農業政策を実現するうえでは要となる課題である。柳田の構想した農業政策には小作料金納制や中農養成策、産業組合の設立などがあげられるが、とくに中農養成策の成功のためには、農村労働力の適切な配置を欠くことができなかった。

柳田の主張する農業政策の特徴は、官によって手厚く農民を保護するのではなく、農民自身が経済的に自立すべきとすることにあつた。こうした考えは当時社会問題化していた自作農の小作農への転落や小作面積の増加などを背景としたものであつた。本家からの小規模な農地の分与と本家への労働力の提供という「小農」の生活を支えていた本家分家関係が、明治維新以降に整備された法体系のもとで地主小作関係へと変質したのである。そしてこの地主小作関係は、安価で固定的な地租と米価の高騰とによってより強固なものとなつていった。柳田は当時のこのような農業政策上の課題を克服するために、中農養成策を唱えたのであつた〔藤井 1995〕。

さて、柳田の考える中農とは「独立自営」の可能な経営体としての農家である。すなわち、農家自身が食べる分だけでなく、それをそのまま、あるいは加工して販売することによって、すべての生活をまかなうことのできるだけの規模の農地を所有する農家が中農である。柳田はその規模について「予は我国農戸の全部をして少くも二町歩以上の田畑を持たしめたと考ふ」と述べている。最低でも 2 ヘクタールの耕地面積である。そして、さらに興味深いのは、全国の農家を中農とするためには日本国内の全耕地面積との兼ね合いから、全体の農家数が減少せざるを得ないという意見を想定し、「農戸の減少は必しも悲しむべきことに非ず、耕地の面積が非常なる制限を被ふれる我国の如きに在りては、悲しむべきは寧ろ増加なり」と述べている点である〔柳田 1904: 289-291〕。すなわち、柳田の中農養成策は、余剰となる農村労働力の農業外への再配置の問題を解決してはじめて成功するのである。これが「労力配賦の問題」である。

この「労力配賦の問題」を政策上の課題とすることの「実際上の利益」について、柳田は『農政学』第六章「農業分配政策概論」においてつぎのように述べている。

現在田舎の人口は陸続都市又は工業地に向ひて集注せるが一般の趨勢なるが、此趨勢は如何なる点まで之を自然に放任し又は積極的に之を懲慚すべきか、如何なる点に於て始て之を防止すべきかを決するに当り、必要なる標準を明示するの点に在り

労働力の需要と供給のバランスを図ること、すなわち農村からの労働力の供給過多を防止し、一方では農民に新たなる労働力需要を示すこと、それが「政策の力」によって実現されるべきだという主張である〔柳田1905：273-274〕。しかし、そのような労働力の再配置に対して、柳田はどのような具体的政策を用意していたのであろうか。

先学の研究でも指摘されてきたように、農村労働力の都会への移動といった問題は当時の主流派の農政学者であった横井時敬や酒匂常明などによって、従来の地主を中心とした農村秩序の崩壊、ひいては兵士や低賃金労働者となるべき人材の流出として問題視されていた。「都会熱」と呼ばれる問題である。しかし、それに対して柳田は「田舎対都会の問題」のなかで真向から異論を唱える〔岩本由1985：108-158〕。「元来人口の都会集注、すなわち今時田舎の若者が都会へ出たがる傾は、人類発展の理法」であり「如何なる手段を施しても絶対的に之を防ぐことは出来るものではない」ということを前提としながら、「自分独は比較的樂觀を抱いて居る」と宣言するのである⁽²⁾。その論拠は2点ある。すなわち、第1点目が「此人口集注の趨勢」に対し「人の力を加へずして自然に反動の兆候が現れて来た」ということであり、第2点目が「国又は公共団体の政策の力を之に対して施し得べき十分なる余地」があるということである〔柳田1906：259〕。

第1点目で柳田が「自然の反動」としているのは、日本の農村から都市への人口移動には「在る年まで働いて再び帰らうと云ふ者、田舎に根拠地を置いて空身で出て来ると云ふ者が多い」ということ、すなわち、再び農村へと帰ることを前提として都市に働きに出る人が多いということである。再び農村へと人口が還流するのであれば農村が疲弊することはないという考え方である。さらに柳田は「日本の如く一時都会に移住致しても亦再び田舎に引還すと云ふ習慣がまだ行はれて居る国では、此の如き人口の移動は一の生産力の分配方法であります」とも述べ、こうした人の移動のあり方が「労力配賦の問題」の解決に直接的な役割を果たしていることを指摘すると同時に、こうした現象が「資本と労力とを平らに全国の各産業間に配布する」という「経済政策の極意」を「不十分ながら天然に為し遂げ」ていることを主張するのである〔柳田1906：260-264〕。

つぎに第2点目については、「国民の永遠の利益の為に政治をする国又は公共団体の立場から考へて、人口の適当なる配布の為に採るべき政策」として「常に人口移動の趨勢を注意して居つて、又一般に都会住民の帰農帰村に対する障碍を除くことをあげる。具体的には「私人の土地を支配する権が必要の程度を過ぎて強くある所有権を今少し限定する」政策や、「産業組合法に依り土地の共同販売共同購入を世話させる」ことで土地所有の流動性を高める政策が示される。これは都市と農村の間の人々の移動を政策の力で円滑に進めることを目指したものである〔柳田1906：273-278〕。

このように、農政学に正面から取り組んでいた時代の柳田の移動に対する視線は、中農養成策実現の前提としての「労力配賦の問題」をとおしたものであった。これは「都会熱」すなわち都市や工業地帯への人口集中という社会問題を内包したものではあったが、柳田はそれを歴史的根拠にもとづく樂觀論によって、あるいは政策の力によって乗り越えることができると確信していたのである⁽³⁾。

しかしながら、中農養成策を含めた柳田の農業政策が農商務省に採用されることはなく、柳田の意見は学界や官界から黙殺された。それどころか、当事者である農民からもこうした柳田の考え方が理解されることはなかった。柳田は失意のうちに官界を去ることになる。これを柳田の「挫折」ととらえ、農政学への決別と民俗学への転向の契機とする考え方もある⁽⁴⁾。しかし、岩本由輝が

「学界・官界からの批判によって、柳田がみずからの主張の時期尚早なることをさとしたからではなく、むしろ農政上の対象となる農民や農村の実態をみるとき、みずからの主張の甘さを感じたから」[岩本由 1985: 30] と述べているように、また川田稔が「いまやこれまでの生活文化が全体として解体しており、農業政策だけでは人々の直面している問題は解決できず、新しい生活文化をいかに再構築するかが問題となるとみていた。そこから柳田の学問は民俗学研究の方向にさらに進んでいくのである。(中略)つまり、柳田の農政論の実践的な展開が民俗学なのであり、柳田の『労働問題』に対する意識と手法は、より深化したと理解するのが妥当なのである」と述べているように[川田 1997: 118]、柳田の「挫折」は農政学と民俗学とを断絶するものではなく、むしろ農政学では対処することのできない新たな現代的課題を対象とするために、民俗学を構想したと考えるべきである[松田 2010b: 150-152]。

2. 柳田の視点の変化と持続

さて、1900年代の柳田が精力的に農政学に関する論考を発表していたのに比して、上述のような経緯を経ながら、1910年代は『遠野物語』や『山島民譚集』といった、後の民俗学へと接続するような民間伝承をテーマとした論考が増える時期である。その間、人の地域移動についての考え方の大幅な変更は認められ⁽⁵⁾ない。柳田が再び積極的に「労力配賦の問題」を取り上げるようになるのは1920年代に入り朝日新聞の論説委員となってからである。しかし、そこでは従来柳田がとってきた楽観的な立場に変化が見られる。

岩本由輝はこの時期の柳田について、「資本主義のもたらした弊害としての都市の不健全と農村の疲弊とを指摘する姿勢が強まってくる」ことを朝日新聞の論説の分析などから指摘する。また『都市と農村』(1929年)からは、従来柳田が想定していた、人びとが農村から都市へ出て再び農村へ帰るという循環が、「文化の中央集権」つまり都市を中心とした資本主義の進展によって途切れ、「当時は人々の心に、農村とのつながりが急速に薄れつつあった状況を憂える強烈な危機意識」を読み取る[岩本由 1976: 405-409]。

たしかに、『都市と農村』において柳田は「我国では都市の労働者の大多数は、近頃別れて出た彼等の兄弟」であり、「人は凡くから都市に向つて居た。さうして用が済めばさつさと還つて行くだけの、家々をめぐり、ゝが持つて居た」という従来の考え方を前提としながらも、その一方で、まだ批判的にはあるが、「今日の来住者等は、遙かに自由であり又独立した動機を有つて居て、そんな昔からの拘束は省みない。人が移つてよいならば家も移すべきだと思つて居る。だから地位資力の許す限り、土地を求めて思ひ、ゝの住居をしようとする」現実を認める。そしてさらに、「近代は還り得る機会が少なく、人は追々に故郷から招かれなくなつた」こと、つまり「今一度村の住民に為る」ことが困難となったことを指摘する。都市から農村へと再び帰るためには「今日では医者とか教員とか、小さな商売」といった「地位」を確立する必要がある、そうでない限りは「たとへ錦を着て戻つても、やはり別荘人の懸離れた生活」をせざるを得ず、村の方でも「自然に予め之を拒まうとする態度を示す」。「村の事情も自分の心持も、もう其間に変つてしまつて、遊びにより外は還られなくなる」というのである。柳田はこれを「半代出稼の悲哀」と呼んだ[柳田 1929: 241-254]。

一方、『明治大正史世相篇』（1931年）になると柳田はさらに「農民とは異質な存在としての永久の市民によって構成される都市の存在を認めるようになる」〔岩本由1976：410〕。「都市は永遠に爰に住み付かうといふ意気込の者が、多くなつて行くと共に活き々として来た。一つ々として失敗であつた建築でも、それが集まつた所は又別に一種の情景を為して居る」といった柳田の記述のなかに〔柳田1931：419-420〕、柳田の都市に対する評価の変化を読み取ることができるのである。

ただ、こうした変化がある一方で、やはり「労力配賦の問題」については従来の考え方が踏襲されてお⁽⁶⁾り、ゆえにそれが一つの到達点を示しているともとらえることができる。たとえば、『明治大正史世相篇』の第11章「労力の配賦」では、「我国の労働者は昨日迄は農民であり、また来年は農民としての仕事に従事するかも知れぬ者が多い。若し此出稼労働者の配分を解決せずして、農村人の都会入りを阻害するならば、町と村とに住む労働者の競争は愈々激しくなる許りで、我国の労力配賦を順調にする道は甚だ困難となりはしまいか。（中略）以前は如何なる状態の下に之がどう動いてゐたかと云ふ事を、出稼といふ現象より一応は歴史的に考へて見る価値も亦茲に存したのである」と、農村労働力の都市への循環的移動を前提として、その適切な配分と歴史的検証が必要であることを引き続き訴えている。その上で、明治期には「出稼の風は山間や雪国の仕事を遣りたくても、充分にやりかねる地方に盛んに行はれたので、家の経営を維持してゆく普通の方法であり、其故に又特殊の現象ではなかつた」こと、また、一時的に大量の労働力を必要とする田植えが「家の力と共に、人々を故郷に繋いだので、村を出てゆく多くの人々を渡り鳥にした」こと⁽⁷⁾、そして、「出稼労働が杜氏の様に農事作業と懸け隔たり、家に帰つても役に立たぬ技術に手練が積む様になる」といわゆる「親方制度」が重要となり、「家につながれて居た多くの出稼労働者は此親方制度に依つて、適宜に配賦せられてゐた」という歴史を指摘する。さらに、移住についても「多くの移住も亦事実出稼の心持で行はれた」としている。「移住植民は出稼と異なり、家を寂しくはするが兎に角に解決であつた」が、結婚して嫁ぐという形式をとる女性とは違い、男性には「何時までも家の力に繋がれてゐる者も多かつた」というのである。すなわち、一方向的移動を前提とした移住⁽⁸⁾であっても、結果的に循環的移動である出稼となってしまうことが多いという指摘である〔柳田1931：542-546〕。

ただし、この内容はあくまでも「明治大正史」であり、『明治大正史世相篇』の書かれた1931（昭和6）年においては過去の出来事となっていることには注意が必要であろう。当時の柳田が農政官僚時代以来の農村労働力の分配という課題を引き継ぎながらも、都市へと定着して新たな文化を創りつつある人びとの存在を積極的に評価していることがうかがえる。

では、1920年代半ばから1930年代初頭にかけての柳田の考え方の変化は何に起因するのか。直接的な要因としてはつぎの2点をあげておきたい。

まず、『都市と農村』が執筆された昭和初期における、農村を「潜在的過剰人口のプールとしながら蓄積を進めて来た日本資本主義経済の構造的破綻」があげられる。農村労働力の都市と農村との循環という柳田の想定する「調和ある関係」は近代地主制の進展や昭和恐慌による都市労働力の余剰等によって実現可能性を失う。岩本由輝はここに柳田の「農政学者としての挫折」を見出しているが〔岩本由1976：404-409〕、こうした現実社会の変化が柳田の考え方に与えた影響には大きなものがあつたと考えられる。

つぎに、西日本の田舎に生まれ育ち、東京へと出てきて日々を送る柳田が、これまで思索の対象としてきた農民の人生と自らの半生との一致を自覚したことを変化の要因としてあげたい。『都市と農村』の「自序」において柳田は、都市人と対立する農民への「激励忠言の適任」として自ら名乗りをあげ、つぎのように述べている。「幸ひなことには、茲に私といふ者が一人、今の都市人の最も普通の型、都市に永く住みながら都市人にもなり切れず、村を少年の日の如く愛慕しつつ、しかも現在の利害から立離れて、二者の葛藤を觀望するの境遇に置かれて居たのである」。ここで柳田は自らの客観的立場を主張しているが、その直後の「私の常識は恐らくは多数を代表する」という一文を自身の当事者性の主張として読むこともできそうである〔柳田 1929 : 182〕。

さらに、こうした要因の背景には、柳田の考え方を根本から揺るがす出来事があったことを指摘しておきたい。すなわち、国際連盟常設委任統治委員として赴いたジュネーブでの経験である。柳田は 1921（大正 10）年から 3 年間、受任国の年報を審査し、国際連盟理事会に意見を具申する委任統治委員を務め、ジュネーブでの委員会に出席している。そこで柳田の関心を強くひいたのは、アフリカや太平洋の島々といった委任統治領における人口移動による人種の混在の問題であった。

柳田が 1923 年に開かれた「国際連盟常設委任統治委員会第三回会議」に提出した報告からは、「柳田がさまざまな種族がきびすを接するような形で生活している地域が存在することを知り、そうした状況のもとでの異民族支配の難しさを実感」した様子を読み取ることができる〔岩本由：1983 : 238〕。委任統治領には多様な原住民のほか、白人の入植者や近隣の地域から移住させられた種族などが混在している。こうした状況にある土地を統治する上で課題となるのは、土地の配分の問題や慣習の相違の問題、原住民の教育の問題などである。柳田は「これらの異質な種族の生活は、常に憎悪と闘争とでかき乱されている」とし、「二種の住民の利害—以前から委任統治地域に生活していた住民とあとからそこに移住した住民との利害—が両立しえないとすれば、委任統治政庁は、当然のこととして、もとの住民の利害に第一番目の考慮を与える」べきと主張する〔柳田 1923 : 219〕。

こうした地球規模での人の移動が引き起こすさまざまな軋轢を目の当たりにした経験が、日本国内における都市と農村との人の移動にともなう社会問題に対する柳田の認識に大きな影響を与えたことは想像に難くない。たとえば、原住民の教育についての「教育された青年は、往々にして、彼らの同胞とヨーロッパ人との間にあって、同胞を軽蔑し、ヨーロッパ人におべっかを使い、そして、そのどちらにも完全に同化できない一つの階層を形成しがちである」という記述からは、『都市と農村』における「いつの時代にも三割四割、時としては半分以上の田舎者を以て組織せられて居りながら、何故に町には村を軽んじ、村を凌ぎ若くは之を利用せんとする氣風が横溢して居たか」という「土を離れた消費者心理」が想起される〔柳田 1929 : 191〕。また、「自序」で「幸ひなことには、茲に私といふ者が一人、今の都市人の最も普通の型、都市に永く住みながら都市人にもなり切れず、村を少年の日の如く愛慕しつつ、しかも現在の利害から立離れて、二者の葛藤を觀望するの境遇に置かれて居たのである」と述べる柳田自身を、原住民の「教育された青年」の延長線上に位置づけることも可能であろう⁽¹¹⁾。

ジュネーブにおける委任統治委員としての経験が、楽観論にもとづいた柳田の従来への農業政策を退けて社会への新たなまなざしを付与したことが、柳田に再び「労力配賦の問題」を語らしめた根

本的要因であろう。

柳田の農政学的主張において、「普通の人びと」が日常的に移動するという事は眼前の事実であり、「労力配賦の問題」としての人の移動を適切に導くことこそが農政学的な課題の一つであった。その後、社会的状況の変化とともに柳田の主張は変化する。しかし、民俗学成立の前史としての柳田の農政学において、人の移動が中心的課題であったことには揺るぎがない。

3. 初期民俗学に吸収された人の移動へのまなざし

それでは、以上のような柳田の人の地域移動に関する考え方は、1930年代初頭の民俗学の成立にあたってどのように取り込まれていったのであろうか。

結論から述べるならば、『郷土生活の研究法』および『民間伝承論』として体系化された民俗学において「労力配賦の問題」としての人の移動や都市生活者の問題が直接的に扱われることはなかった。もちろん、そのことをもって柳田が人の移動や都市への視線を遮断したと批判することも可能であろう。ただ、柳田が『都市と農村』や『明治大正史世相篇』へとたどりついた経緯を思い出したい。そもそも、柳田が人の移動の問題を取りあげたのは農村労働力の適切な分配という課題を解決するためであり、それはすなわち中農養成という政策を実現するためであった。それを考慮すれば、1930年代以降、再び柳田の視線が農村へと回帰したことは決して責められるべきことではないであろう。

また、『都市と農村』において「文化の中央集権」を鋭く批判した柳田が、「我々は民間即ち有識階級の外に於て（もしくは彼等の有識ぶらざる境涯に於て）、文字以外の力によつて保留せられて居る従来の活き方、又は働き方考へ方を、弘く人生を学び知る手段として観察して見たい」という眼目のもとで〔柳田1934:20〕、あるいは「郷土研究の第一義は、手短かに言ふならば平民の過去を知ることであり」とする学問的目的のもとで〔柳田1935:202〕、新文化の導入の窓口であり、文化の変革の場である都市に対して、「我々が日本人全体が経て来た道を調査する上では、近世に到つて始めて勃興して来た都会に重きを置くことは不可である」という態度をとったことも理解できる〔柳田1934:71〕。

一方、柄谷行人は、柳田が意図的に人の移動、柄谷の言う「遊動性」を排除したと主張する。柄谷は柳田のみた遊動性を、平地民によって滅ぼされ追いやられた山人による「根本的に『国家に抗する』タイプ」と、芸術的漂泊民のように「定住性とそれに伴う服従性を拒否するが、他方で、定住民を支配する権力とつながっている」タイプとの2種類に分ける。そして1930年代に柳田がみしたのは後者のタイプ、すなわち「国家や資本によって発動される遊動性」であり、「帝国主義的な膨張」に対抗するために意識的に「定住民に焦点をあてた」というのである〔柄谷2014:116-120, 193-196〕。

ただ、ここで注意しなければならないのは、1930年代以降の民俗学において必ずしも人の移動の問題が等閑視されたわけではないということである。たとえば『郷土生活の研究法』では、「民俗資料の分類」の「第一部 有形文化」のなかの「資料取得方法」および「交通」の項で人の移動が扱われている。

まず「資料取得方法」では、柳田は「生活資料の取得方法」を「直接取得方法」と「間接取得方

法」に分け、前者に自然物の採取や漁や狩、それらの加工、そして農をあげ、後者に交易と市をあげている。問題となるのは後者である。ここで柳田は交易の古い形態としての「居買ひ」、すなわち売手が商品をたずさえて売り歩くという形態から、しだいに売手は一定の場所で臨時の棚に品物を並べて買手を待つ「市」という形態に変化したことを指摘する。さらにこうした市が「だんだん大きくなりまた遠くに立つやうになつてから、農村人の旅行の機会もやうやく繁く」なり、それが「知識交換の機会」ともなったことを指摘している〔柳田 1935：278-282〕。

また「交通」では、とくに「常でさへ不足勝ちな田畑の収穫が、一朝天災にでも遭へば忽ちにして困窮」し「嫌でも自ら進んで、交易の途に就かねばならぬ必要に迫られ」る「山村の者」を取りあげ、甲州の桶屋の職人の出稼ぎや近江や伊勢の商人を紹介する。さらに、商うためのまともな品物さへ持たない「旅人」⁽¹²⁾が有形無形の品々、すなわちとりとめもない品物や、信仰や芸能といったものを対価として食物や宿を求め歩いた例を示し、彼らが「農家の消費生活を混乱せしめたことは想像以上」だと述べている〔柳田 1935：283-285〕。

一方、『民間伝承論』や『郷土生活の研究法』と同時代の1934(昭和9)年から1937(昭和12)年にかけて柳田の主導で行なわれたいわゆる「山村調査」(正式名称は「日本僻陬諸村における郷党生活の資料蒐集調査」)で用意された質問項目にも目を向けてみよう。たとえば、調査最終年に使用された「郷土生活研究採集手帖」にはつぎのような質問項目が見られる。⁽¹³⁾

14. 出稼には今までどの方面へ多く出ましたか。

▽時をきめて行き又帰つて来たもの、例へば酒屋のトウジ、茶摘み女の様なものにとくに注意する。

15. 外へ出て成功した人がありますか。

其人たちは終始通信をして居ますか。

村の者をよく世話をしてくれますか。

▽外で成功した人に対する村人の感情を知りたし。

16. 外に久しく出て居て此頃帰つて居る人がありますか。

○其人たちはどういふ風に世間を評して居ますか。

○之に対する村の人々の感想はどんなですか。

○婦人の場合はどうですか。

このような質問項目を用意した柳田の意図はどこにあるのか。その答えは前項までで取り上げた著作のなかに見出すことができそうである。⁽¹⁴⁾

たとえば、14の「出稼には今までどの方面へ多く出ましたか」という質問においては具体的に「トウジ」や「茶摘み女」といった例をあげている。こうした季節的に余剰となる農村の労働力が毎年どのように活用されていたかといった問いは、すでに都市と農村における労働力の循環が滞っていた昭和初期当時の柳田にとって重要なものであったはずである。

つぎに15の「外へ出て成功した人がありますか。其人たちは終始通信をして居ますか。村の者をよく世話をしてくれますか」については、『都市と農村』において中心的課題であった農村出身

者がその多くを占める都市生活者と農村生活者との関係を問うものであろう。村を出て都市で生活する人びとと農村に暮らす人びととがどのような関係を構築し、その関係がどういった影響を農村に及ぼしているのか。それを「外で成功した人に対する村人の感情」から推し量ろうとしていると考えられる。

最後に16の「外に久しく出て居て此頃帰つて居る人がいますか」からは、柳田が都市と農村の間の労働力の循環的移動の可能性への模索を続けている様子がうかがえる。『都市と農村』では、都市へと働きに出た人びとが以前のように農村へと帰ることができない状況が指摘されているが、そうした現状をより具体的に把握しようとする試みが「其人たちはどういふ風に世間を評して居ますか」「之に対する村の人々の感想はどんなですか」「婦人の場合はどうですか」といった質問内容にあらわれている。さらに、人が村と外の世界とを出入りすることがどのように村の生活に影響を与えているかといった課題についても、上記の質問項目から明らかにしようとしていたと考えられる⁽¹⁵⁾。

こうした柳田の関心は、「採集手帖（沿海地方用）」にも引き継がれる。1938（昭和13）年の「手帖」には他所からの入漁の条件や、他村からの舟子や奉公人、日傭の雇入れ、出稼ぎや遠方への出漁と成功者との連絡などについての質問がみられるほか、

22. 廻船、お札配り、行脚僧、旅芸人、流罪人等を如何に待遇しましたか。

その他物売り以外に、外から文化を齎した人の種類。村人の待遇振り。

彼等が村に及ぼした影響を知りたい。

といった項目も用意されている。

鶴見和子は「一方では、定住民としての常民は、漂泊民とのあいによって覚醒され、活力を賦与される。また他方では、ひごろは定住している常民が、あるきっかけで、一時的に漂泊することによって、新しい視野がひらけ、活力をとりもどす。常民が社会変動の担い手となるには、みずから、定住—漂泊—定住のサイクルを通過するか、または、あるいはその上に、漂泊者との衝撃的なあいが必要である」という社会変動論の立場に立ち、「漂泊と定住とをくりかえしおこなうことが、普通の人間の生活のパターンだという信念が柳田自身の体験の中から生まれている」ことを指摘する〔鶴見1977：202，208〕。定住を基礎とする「普通の人びと」が一時的に漂泊の状態になること、すなわち一時的な地域移動を行なうことは日常であり、その移動が社会に変革をもたらすというのである。鶴見はこれを桜井徳太郎のハレ・ケ・ケガレを循環的にとらえる考え方を援用しながら、人びとが長年の定住により「精神的活力の枯渇」をきたした場合、その解消には自らが旅に出ることと外から来る漂泊者を迎えることの二通りの方法が必要になるとしたのである〔鶴見1977：217〕。

こうした社会変動論の立場から『郷土生活の研究法』や「手帖」の質問項目をふりかえるならば、何が村に変革をもたらしてきたのかという命題について、村人本人の経験、あるいは村から出た人びととの接触をとおして考察しようとする柳田の意図を読み取ることができるであろう。この柳田の意図の背景には1927（昭和2）年の「蝸牛考」における方言圏論の提起をきっかけとした、都市を「文化を発生・波及させる装置」としてとらえ直す姿勢を読み取ることができる。こうした発

想の転換によって、都市は単に労働力を吸収する場という地位を脱する。「柳田は都市を外国文化の移入の窓口ばかりでなく、新しい文化の基準を變形・創造し、さらに周囲に向けて提供しつづけることこそ、農村など周囲の領域支配を正当化する、都市の本質であるとみなしたのである」〔岩本通 1998: 42〕。すなわち、柳田農政学における「労力配賦の問題」は形を変えて民俗学に吸収されたのである。

③……………人の移動を見失うふたつの画期

1. 漂泊民・非農民への注目

1970年代後半から1980年代前半という時代は民俗学一般ばかりでなく人の地域移動という研究課題に関しても大きな画期であった。研究動向特集号である『日本民俗学』第148号(1983年)の「総説」で宮田登は「柳田国男没後の日本民俗学」について、「柳田・折口という強烈な個性によって支えられていた時代が終わり、その後に訪れた空白部は、師説の祖述から修正への作業によって埋められてきた」と述べたうえで、二つの傾向を指摘している。すなわち、一つが「柳田以外の民俗研究の視点を見落としていたのではないかという反省に立ち、柳田民俗学とパラレルな立場をもち得る民俗学者たちの成果を再検討する志向が形成されている」ということであり、もう一つが「柳田国男から直接指導を受けることなく、大学教育の中で民俗学の知識を与えられ、その後各地で民俗研究に従事する世代が増加し、その世代の活動と成果が問われはじめていく」ということである。どちらも民俗学における人の地域移動という問題の位置づけに大きくかかわる指摘であるが、2点目については後述することとし、1点目についてまずは検討したい。

宮田は当時、関敬吾、桜田勝徳、大間知篤三、和歌森太郎ら「柳田門下」の著作集が完成したことを取りあげ、彼らによる「民俗学の性格・方法論をめぐってのそれぞれの主張は、次の世代に大きな示唆を与える」と評価している。そうしたなか、未完継続中の著作集の一つとしてとくに『高取正男著作集』をあげ、「夭逝した高取の著作集は、時宜を得たもので、漂泊と定住の視点を、歴史学と民俗学の接点に捉えたユニークな主張は、今後さらに検討されるべきものである」とのコメントを付して評価している点が興味深い。こうした宮田のコメントは、同稿の後半で網野善彦らを筆頭に「中世史学を中心とした『社会史』の発想の一つに、積極的に民俗資料を活用することにより、歴史を豊かに描こうとする立場」が生じつつあることを指摘し、「歴史学と民俗学の接点にアプローチする視点」として「漂泊と定住」を取り上げるための布石である。そこでは「農業民と非農業民の対比」を具体的にとらえた研究として再び高取正男の仕事が取りあげられ、井上鋭夫の『山の民・川の民』もまた「歴史学からの最初の成果」との評価が与えられている〔宮田 1983: 1-5〕。

こうした中世史学との接合は当時の民俗学界に大きなインパクトを与えた。⁽¹⁶⁾宮田が研究動向号の「総説」を発表した翌年の1984年には「民俗学における『非農業民』」をテーマに掲げて大塚民俗学会年会のシンポジウムが開かれる。本シンポジウムの冒頭で趣旨説明をした司会の和歌森民男はまず、「『非農業民』の検討は民俗学においてはことさらに新しいものではなく、「民俗学では、山とか海とか町の人々については、すでにかかなりの研究を蓄積」していると主張する。それに対して

「隣接の諸科学」, とくに「日本中世史研究」において「近年『非農業民』に注目して『人間・社会・文化』に関する研究が盛ん」になってきており, 「留意すべきは, 研究の過程でこういう研究に携わっている方々が, しばしば民俗学に学んでと称しておられること, あるいは言及はなくとも, 明らかに民俗学の方法ないし成果を採り入れておられること, こういった状況が確認される」というのである。

こうした, いわば「中世史から民俗学へのアプローチ」に関する主張は2ページ半に満たない紙幅のなかでさらに繰り返される。「隣接科学のことにこだわるようですが, 日本中世史研究の分野でも, 『非農業民』ということが今新たな研究対象になっております。ご承知のように網野善彦さんらの活動が代表となりますが, その活動の基礎に, 『非農業民』をはじめとして, 従来見のがされてきた, いわゆる「周縁」的諸分野への見事な照明」, といったものへの関心・研究があって, 新しい傾向の歴史学が, 日本中世史分野を中心に形成されつつあるというわけです。そして, それらの方々は, 民俗学の成果の重視ということを自ら述べ, また, 周りでも認めておられます。このように隣接諸科学でも取りあげられるようになった「非農業民」の問題を「私たちの方でも, 真向から, その方法も含めて再検討してみようというのが, 本日のテーマ設定の動機あるいは視点」だというのである [大塚民俗学会 1984: 1-3]。

この一連の文章からは, これまで方法論や理論体系をめぐって民俗学に対して批判的な視線を浴びせてきた歴史学がついに民俗学の学問的価値を認めた, というある種の高揚感を感じ取ることができる。たしかに, それまでの民俗学が「非農業民」を取りあげてきたことは事実であろう。しかし, 果たしてその成果は体系化されたものであったのか。また, 中世史研究が民俗学にまで目を配っているのに対して, 民俗学の方では歴史学的成果を吸収する取り組みが充分に行なわれてきたのか。当時の学問的状況を踏まえた批判的な検証が必要であったはずである。

また, 近年, 柄谷行人は, 講座派マルクス主義の歴史学が前提とする領主と農業民という生産の図式に対して, 農業共同体の外部にいる非農業民をとらえ直すことで批判を加えた網野善彦の論理を「常民=稲作農民を中心とした」柳田民俗学への批判に適用しようとした当時の柳田批判の風潮を指摘している [柄谷 2014: 33-37]。すなわち, 中世史研究の視点と方法に, 柳田の民俗学を超越する可能性が見いだされたのである。

「非農業民」あるいは「漂泊と定住」という視点から, 人の移動に関する議論が顕在化したことは歓迎されるべきことである。しかし, ここで一つの疑問が生じる。人の移動とは「定住者」あるいは「農業民」と対置される人びとによってのみ担われてきたものなのであろうか。柳田が農政学的視点から見つめていた人びとはどこへ行ってしまったのか。

上記シンポジウムにおいて湯川洋司は「山の人々」と題する講演を行なっているが, そのなかで, 「定住性山民と移動性山民を区分するポイントつまり定住・非定住ということが山民の場合どれほど本質的な相違となるのか, 実のところよくわかって」おらず, 「これらを異質な存在として切り離してしまわず, 双方の関連性を明らかにする方向のなかで山民の問題は考えられるべき」と指摘する。しかし一方では, 橋本鉄男による研究を取りあげ, 「民俗学における常民を定着農耕民として理解する方向を否定して, こうした漂泊生業者も常民の概念に加えて二項対立的に検討すべきだとの注目すべき見解を出された」と評価している [大塚民俗学会 1984: 5-6]。橋本鉄男の研究

とは1979年に『日本民俗学』誌上に発表された「漂泊生業者論への視角」のことである。

この論考の冒頭で橋本は、柳田が「もともと農民・非農民を二項対立的に考えて、さらにスケールの大きな概念把握を目途していた」と述べたうえで、1979年当時の学問的潮流に「漂泊生業者としての非農民（諸職諸道）の群のイメージを、定住生業者としての農民（従来の常民概念の核心）の群のイメージに対立させて問いつつある何か」を感じ取れるとし、「漂泊生業者論といった立場」を確立する必要を説いている〔橋本1979：21〕。柳田が農民と非農民を二項対立的にとらえていたという橋本の考えは、先に紹介した鶴見和子の論考に刺激を受けて形成されたものようである。

鶴見は「一定の土地に定住するものとして定義」され、「漂泊民から識別」された「常民」を設定し、彼らを中心として漂泊と定住との関係を見ている。そして彼ら「常民」こそが柳田の主張する「地方分権型の発展」の担い手、つまり社会変動の担い手だと主張するのである。しかし、彼らは漂泊者と対立することによって社会変動のエネルギーを獲得してきたのではない。鶴見が、常民は「漂泊民とのあいによって覚醒され、活力を賦与され」、さらに「ひごろは定住している常民が、あるきっかけで、一時的に漂泊することによって、新しい視野がひらけ、活力をとりもどす」と考えたように、両者の混じりあい、また両者の立場が逆転するという複雑な関係性のなかにこそ社会変動のエネルギーが秘められているのである。

鶴見は柳田のとった方法について三つの点を指摘している。まず、「柳田は、漂泊を、生涯漂泊と一時漂泊に分けた。そして一時漂泊は、旅、もとの定住地へ回帰する一と、移住一他の場合へ漂着する一との二つの経路をふくむ。そこで漂泊と定住とのかんけいは、生涯漂泊と一時漂泊と定住との、相互関連と、相互浸透の過程として展望することができる」こと。つぎに、「柳田が、定住者を基点として、漂泊と定住との相互作用を記述したのは、社会の構造変化に、場所への照準が必要だと考えたため」であり、「漂泊者が、社会の構造的変化に寄与するのは、特定の場所に、根をおろしている者たちへの衝迫をとおしてだと、考えたため」であること。そして、最後に「柳田は、『定住』と『漂泊』とを、抽象概念として設定したのではなく、「農民および、その他のさまざまな漂泊者集団の生活誌を、具体的に、詳細に、しらべあげることをとおして、だんだんに、生涯漂泊、一時漂泊、定住というカテゴリーを、抽出した」のであり、この「カテゴリー抽出の手続き」は「二項論理から出発して類型をつくってゆくやり方とも違い、また、既存の学問の既製のカテゴリーを借用するやり方とも違う」ということである〔鶴見1977：211-212〕。つまり、鶴見は定住者と漂泊者という枠組みを設定しながらも、両者の接触や立場の入れ替わりにこそ社会変動の可能性を見出しているのであり、対立する二者を個別に描こうとしているわけではないのである。そのことは「二項論理」にもとづく類型化によらないとする柳田の方法論の理解と賛同からも読み取ることができる。

このように、「漂泊」と「定住」あるいは「農業民」と「非農業民」といった二項対立を相対化しようとしていたのは鶴見だけではない。実は、「漂泊と定住の視点を、歴史学と民俗学の接点に捉えたユニークな主張」として宮田登が取りあげた高取正男もまた、こうした二項対立に疑問を投げかけた一人であった。

そもそも高取は早くから遍歴する「非農民」あるいは「非農耕民」に着目し、網野善彦の「非農業民」という枠組みの設定に大きな影響を与えているが〔網野1984：27〕、その高取自身が「定住農

耕者」と「漂泊非農耕民」という二項対立の限界を示唆しているのである。高取は「日本は古代以来、瑞穂の国と美称されてきた」が、「米作りの村はそれによって完結した自給自足の、安定した小宇宙でありえたらうか」、「これまで日本人は、米作りを少し過大評価し、米作りによる村落生活の内容を、買いかぶってきたように思われる」と、米を中心とした村落生活の安定性に疑義を投げかける。そのうえで柳田国男の『日本農民史』を引用し、中世以来、近代に入っても「村方の名でよばれた自作農や手作り地主たちは、家族や下人など従属労働力以外に、農繁期にかぎって雇用する零細農を、周辺に再生産していた」こと、つまり、農繁期にだけ必要な労働力が地主たちによって囲い込まれた「半定住的農耕補助者」は、出稼ぎや巡礼、物乞いといった旅によってかろうじて生きながらえてきたということを指摘する。すなわち、「定住に対する漂泊という非連続性と、差違性的のみに支えられた二項対立の認識では、歴史の実態に迫ることはむづかし」く、これまでの研究では「米作りさえしていたらまちがないという父祖伝来の信仰が、定住農耕民に対する非定住漂泊民という二項対立の認識を生み、水稲耕作による定住社会が本源的に孕んでいたらしい二重構造を、ともすると見逃してきた」というのである〔高取1977:32-36〕。

木地屋を研究対象としていた橋本鉄男にとって、定住生活を送っていることを基準とした従来の常民概念に対して、非常民としての漂泊生業者という対立概念を設定することはある意味必然であったはずである。橋本の意図は「従来の常民概念に、以上の漂泊生業者(非農民としての諸職諸道)を非常民としてでなく、定住生業者(農民)とともに包摂する立場をわたくしはとりたい。そうした中でむしろこの二項概念を対立してみて行くことが、今後は日本民俗学の認識対象として、次元のことなる展開を期待し得るのでなかろうか」という文章から読み取ることができる。

しかし、こうした橋本の主張する二項対立からはこぼれ落ちる「普通の人びと」による日常的な移動、鶴見の言葉を借りるなら「常民」による「一時的漂泊」が歴史的に繰り返されてきたということも忘れられてはならなかった。にもかかわらず、その後の民俗学では定住と漂泊とが断絶し、特殊な生活を送る人びとによる諸職諸道としての漂泊民の研究へと縮小していった。岩本通弥は1980年当時の民俗学が『『常民』概念の形成において、異常性を注視する一方、異質性を捨象した』と指摘する〔岩本1980:78〕。漂泊という「異常性」への注目の陰で、「常民」による移動という定住に対する「異質性」は捨象されていったということができよう。そこには「普通の人びと」による日常的な移動が引き起こす社会変動のダイナミズムの解明や、水田稲作を中心に据えた日本的世界観の問い直しといった大きな目標は見られない。日常としての人の地域移動の研究は漂泊と定住という二項対立の狭間に埋没していったのである。⁽¹⁷⁾

2. 個別分析法と人の移動

宮田登が指摘していた1970年代後半から1980年代前半にかけての民俗学の新しい潮流のもう一点は、柳田国男の指導を直接受けず大学教育のなかで民俗学を学んできた世代の活躍であった。その世代の代表の一人が福田アジオであろう。福田はとくに方法論について、従来の民俗学、すなわち柳田の確立した民俗学や柳田の没後にその後継者たちによって発展された民俗学を鋭く批判したが、そのなかで大きな位置を占めていたのが重出立証法⁽¹⁸⁾に対する批判である。

重出立証法とは言うまでもなく、全国に見られる同一の民俗を集めて比較し、時代的変遷を明ら

かにしようとする研究方法であるが、福田はこの重出立証法およびその実行にあたって設定された研究体制に対して三つの問題点を指摘する。福田の表現をそのまま用いるならば「第一に柳田の資料操作法である重出立証法は民俗事象の変遷を解き明かすことができないのではないかという点、第二に重出立証法を方法とする柳田の民俗学は個々の民俗を保持している伝承母体を軽視し、たまたま民俗を伝承している場所としかみななかったこと、すなわち個別の『郷土』を手段としてのみ位置づけていた点、第三に柳田は研究と調査を分離させ、それを人間関係にも拡大し、自分が研究を独占し、地方で『郷土』を調査する人間を単なる民俗資料の報告者として位置づけた点」の3点である〔福田1984：87〕。つまり、福田は重出立証法自体の有効性を疑うと同時に、柳田が、それぞれの民俗が有機的に結びついて存在しているはずの「郷土」から各民俗事象を切り離して比較のための素材として扱い、さらに各地方で調査にあたる人びとが独自の研究・分析をすることを許さず、研究の機会と成果を独占したと主張したのである。そしてさらに、こうした研究法と研究体制は、柳田が没した後も大学や行政機関に所属する中央の研究者によって引き継がれたという⁽¹⁹⁾。

このような従来の民俗学に対して福田が提唱した新しい民俗学の特徴は伝承母体を単位とした個別分析法にある。

福田は民俗学の目的を「歴史的世界を再構成する」こととしたうえで、民俗学の研究対象である民俗を、「それを研究対象として歴史的再構成が可能」な「超世代的に伝承されているもの」と規定する。そしてその民俗、すなわち「伝承されている事象」は、「どのように人々によって担われ、いかなる条件が過去から現在にいたるまで伝承し保持させているかが明らかにできるものでなければならぬ」とし、「民俗は、その伝承が存在する母体としての集団を確定できるものでなければならぬ」とする。それが「伝承母体」である。

この伝承母体は、「その構成員は時間と共に具体的存在としては変化し、交替して行くが、その構成のあり方や秩序は存続して永くその構成員に対して一定の規制を加えてその事象を担わせる集団」であり、「その基礎におくものが構成員としての人間ではなく、永久不変のものと考えられる存在」であるがゆえに上記の条件を満たすことになる。そして、この「伝承母体が構成員の生死を超えて存続するのは、永久に存在する特定の大地を占取していること」による。つまり、「一定の領域の大地を占取して、その基盤の上に超世代的に生活を存続させる集団が民俗の伝承母体」であり、この伝承母体が「規制力をもってその構成員に担わせることで伝承されている事象」が民俗なのである⁽²⁰⁾〔福田1984：256-259〕。

しかし、ここで一つ大きな疑問が生じる。土地と結びつかない民俗は存在しないのか、と。

福田の定義で「民俗」は「一定領域を占取して超世代的に存続する社会集団」としての伝承母体を前提としたものであり、土地と結びつかない民俗は存在しないことになる。もちろん福田が提示した条件のもとで民俗を規定しようとするれば、一定の土地を占有し超世代的な伝承を可能にする集団の存在が不可欠となる。歴史資料としての民俗が一定の客観性を担保されるには、条件の変わらない安定した容器のなかでの実験が必要となるからである。しかし、この容器に採収されて資料化されることで民俗と呼ばれる事象は、人びとの暮らしを構成する膨大な生活世界のごく一部でしかない。科学的な方法論の名のもとにあまりにも多くの人びとと生活事象が切り捨てられてしまうのである⁽²¹⁾。

さらに福田は、民俗事象が成立する背景に「その事象を必然化する諸条件がその伝承母体に成立」していることを強調し、「新たな特定の民俗を形成させる条件は突然伝承母体に出てくるのではなく、その伝承母体にすでに存在する諸条件を前提にして、その歴史的展開の中で出現してくるのであり、相互に関係が存在する」としたうえで、「民俗を形成、展開あるいは変化させるものをすべて伝承母体の外に求める考えは否定されねばならない」と主張する〔福田1984:263〕。これはおそらく、民俗の変化の要因を地域外に求める重出立証法を念頭に置いての批判的記述であろう。

福田の主張した民俗学は批判的に学史を検討することによって導き出された一つの方法として、とくに地域と民俗との有機的な連関を重視した新しい民俗学として高く評価されるべきである。また、民俗学の方法論的科学性が問われるなか、伝承母体を設定することで厳密な方法による伝承の資料化が模索されたことも、民俗学にとっては大きな進歩であった。であるがゆえに、福田の提唱する方法は現在でも民俗学の基本的方法の一つとして位置づけられているのであろう。

ただ、福田の方法が民俗学全体を覆い得るものであるかと問われれば、筆者の答えは否である。中世史研究が明らかにしつつある時代から現代まで、一定の土地に軸足を置き、そこに構成される社会集団のなかでの生活を淡々と伝承してきた人びとがどれだけいるであろうか。少なくとも、筆者がこれまで対峙してきた人びとは、積極的に「むら」の外へと働きに出てきた人びとであり、「むら」の外からの情報に強い関心を抱いてきた人びとであった〔松田2010a〕。また、文献史学へのオルタナティブとしての民俗学が向き合う対象のなかで、常に資料としての「現在」が重要な位置を占めることを考えれば、一定の土地との静的な関係を重視する方法が、現代社会においてその有効性に限定を持つことは言を俟たない。

こうした疑問は、福田が活発な発言を展開した当時から提示されていた。福田の議論に対していち早く異論を唱えたのは岩本通弥である。岩本は福田の主張した個別分析法による民俗学を「民俗とその伝承母体つまり地域との有機的連関を強調した別の民俗学」と位置づけ〔岩本通1980:70〕、全面的な批判を展開する。その議論は多岐にわたるが、人の移動と関わる伝承母体の問題に集中するならば、岩本の危惧は「すべての民俗が伝承母体という社会の構造から把握できるのか」、「個別分析法では分析できないものは排除され、分析できるものだけが分析される結果になるのではないか」ということであった〔岩本通1993:30〕。

また、千葉徳爾は1985年に発表された講演記録において「これまでの日本の大多数の平凡な人びとが、歴史がはじまってこのかたつい最近まで狭い自分たちのムラに閉じこもり、そのムラ限りの風俗習慣、いま私どもが民俗という名をつけてこの学会の研究対象としているものを守り育てて来たように予想しているのは、果してほんとうのことなのだろうか」、「多くの民俗学の研究が、ほとんどすべてムラを調査単位とし、そのムラの中で生活が一つのまとまりをもち、それ自体で独立した民俗をつくっているという前提をもって調査研究して来たことは、民俗学を研究する上で果してもっとも適切なる方法なのであろうか」といった疑問を提示している〔千葉1985:2-4〕。そのうえで、千葉は「広い世間ほどそこに住む者は進歩しすぐれた生活をする機会が多いのだ」あるいは「ムラをこえた広範な結びつきを機会があれば実現したい」といった人びとの考えに発する「習俗や行動価値観」などを総称して「広域志向の民俗」と呼んでいる。⁽²²⁾

福田の伝承母体を基礎とした個別分析法は、人を静的な存在にとらえ、人が一つの場のみとの関

係性のなかで生きることを前提とした研究方法である。人の移動とはまさに、福田の設定した伝承母体という社会構造の外へと向かうものであり、個別分析法によって民俗学の外へと追いやられた事象だということができる。しかし、千葉が「広域志向の民俗」と表現したように、人はムラの外へ向かって結びつきを求める動的な存在であり、その様相をとらえることができなければ、民俗学の学問的役割は大きくそがれることとなる。求められているのは、目の前の事象が伝承母体を有する民俗であるか否かを判断することではなく、人の移動という事象の存在そのものに気づくことであろう。

おわりに

小稿では、人の地域移動、とくに「漂泊民」あるいは「諸職諸道」の人びとによるのではなく、「普通の人びと」による日常的な移動が、民俗学史のなかでどのように扱われてきたかという課題について論じてきた。民俗学の成立に深いかかわりをもつ農政学において、柳田国男は自らの主張する中農養成策の実現のために「労力配賦の問題」に取り組んだ。これは都市と農村を移動する農村労働力の適切な配置をめざすものであった。こうした柳田の関心は、人の移動がもたらす農村生活への影響をとらえる視点として、農政学の延長線上に成立した民俗学のなかに吸収される。だが、柳田没後に柳田民俗学の批判的検証のなかから生まれてきた新しい民俗学においては、人の移動は「非常民」あるいは「非農業民」などによる特殊な事象として狭小な枠組みのなかに囲い込まれ、あるいは地域という伝承母体を有さないイレギュラーな事象として民俗学の周縁へと追いやられた。

しかし、これら両者のはざまでかえりみられることのない「普通の人びと」の日常はあまりにも多すぎる。それらをすくいあげ、対象化することなしに民俗学が日常の学を名乗ることはできないであろう。とくに現代は過去に例のないほどに人の移動が日常化した時代である。人の移動を特殊視した民俗学はもとより、地域を限って人の移動を遮断したうえで歴史の再構成を試みる民俗学の活躍の場は徐々に狭まっている。

だが、ひとたび人びとの日常的な移動への視点を獲得することができれば、移動するという現象そのものについての研究だけではなく、家族や先祖にかかわる問題、社会集団の形成や所属にかかわる問題、伝統文化の伝承にかかわる問題、ジェンダーにかかわる問題など、従来の民俗学で扱われてきた課題の問い直しや新たな課題の発見も可能となり、民俗学に期待される役割は大きく広がるはずである。そうした作業を具体的な事例に沿って積み重ねることで小稿の意義を確認していくことが、今後の筆者の課題となる。

註

(1)——「普通の人びと」とは誰のことを指すのか。こうした問いは「常民」に含まれる人びとの範囲についての議論と重なり合う複雑な側面を有するが、ここでは単純に、上であげた諸職諸道に従事するか否かにかかわら

ず、村や町、あるいは都市に居住しながら、農業にたずさわったり、身につけた技術で稼いだり、会社勤めをしたりといった形で生活の糧を得て暮らしを送っている人びとのこととしたい。

(2)——柳田は楽観論を展開する一方で、「家の永続」および「労力の品質の減退」といった問題を提示している。すなわち、前者は都会への移住によってもたらされる「ドミシード即ち家殺し」によって「各人と其祖先との聯絡即ち家の存在の自覚」が失われることを憂慮したものであり、後者は「今後の農業には智力も最も緊要」であるにもかかわらず「比較的良い労力ばかりを都会に吸取られると云ふこと」を警戒したものである。しかし、前者については「一時の移住者には当嵌らぬ議論」であるとしており、後者についても政策上「労力が田舎と都会との間に均等に配布せらるゝこと」が期されれば問題はないと考えていたようである〔柳田 1906：267-268, 271〕。

(3)——ただ、柳田の考えるこうした政策が実際に実現可能性を持つだけの具体性を備えていたかについては疑問が残る。そのことは柳田が『時代ト農政』重版の際に「附記」に記した述懐にもうかがうことができる。柳田は第一次世界大戦後に農政学を離れたことを悔いると同時に自らの農政学に関する論考を「それまでの旧稿は二、三の書物になつたが余りに貧弱であつた。(中略)今読んでみてもこれらの話の中には疑つたばかりで理由の説明出来ない不思議な事実がいくらかも残つてゐる」と述べている〔柳田 1928b：384〕。

(4)——たとえば福田アジオは、柳田が1910年に「『時代ト農政』をまとめることで、一〇年の間主張を展開してきた農政学に別れを告げるにいたつたのである。あきらかに柳田国男の農政学は挫折したのである。そのことが民俗学への途を用意した」〔福田 1992：23〕と述べ、農政学と民俗学との断絶を強調する。また、菅豊はこの福田の見解にもとづきながら、柳田が「生業と労働の分野」に関して「冷淡」であつたことの理由として、農政学における「挫折」をあげている。農政学者、あるいは農政官僚としての柳田にとって「経済、あるいは生業・労働としての農業への関心は、低いどころか、研究の本質であつた」が、その農政学に「挫折」したことが「新しい国学を模索する柳田に生業論を避けさせた」というのである〔菅 2001：56-57〕。

(5)——もちろんこの時期の柳田が山人や被差別民としての漂泊芸能者などに強い関心を抱いていたことは指摘しておかなければならない。しかし、ここでの筆者の関心はあくまでも「普通の人びと」による日常的な移動にある。

(6)——農村労働力の都市への移動についての柳田の楽観的立場については前項で示したが、その根拠が具体的

に示されるのは1920年代中ごろから1930年代初頭にかけてである。とくに『日本農民史』(1925年)において柳田は「村の労力の自然の調節法として、政治権力の干渉とは無関係に、十数世紀来我々は動きまはつて居る」と宣言したうえで「農村の盛衰といふ語の真の意味は、住民の幸福の総量の増減でなければならぬ」とし、安易に農村人口の減少を憂えることを具体例を示しながら戒めている〔柳田 1925:476-477〕。なお、書物としての『日本農民史』の成立については不明な部分が多い。そもそも本書の内容は1925(大正14)年4月から9月にかけて行なわれたと考えられている早稲田大学での講義にもとづいており、その後、同大学の「講義録」として刊行され、さらに1931(昭和6)年以降、刀江書院等の出版社より刊行された。こうした事情を詳細に検討した結果、『柳田國男全集』では「日本農民史」の刊行を1925年9月としている〔佐藤 1997：817-825〕。

(7)——「渡り鳥」とは都市と農村とを循環的に移動する農村労働者をさす比喩である。

(8)——一方で柳田は「出稼ぎの心算で出て行つても、反対に移住となつたものもあつた」として「かの地で死んだ者、理由があつて国に帰つて来られなくなつた者、又近來は婚姻に依つて出先きに定住する者、或は出稼ぎの力が故郷の綱よりも強くなつた結果、移住となる例」をあげている〔柳田 1931：546〕。

(9)——委任統治とはすなわち、第一次世界大戦の敗戦国であるドイツ帝国の植民地およびオスマン帝国の支配地域を国際連盟によって委任された国が統治し、当該地域の自治と独立を支援しようとする制度である。ただし、柳田も「然し此処にも注意すべきことは、委任統治の振当は国際連盟の理事会や総会で決定したのではなくて、不思議にも欧州の最高会議で決定した。受任国は人道に対する義侠心ばかりで統治を引き受けたのでは決してない」と述べているように〔柳田 1922：17〕、その実態が従来の植民地と大きく変わるものでなかつたことは明らかである。

(10)——ただし、この報告が委任統治領の利益を第一に考える委任統治委員の意見として国際会議の場に提出されたものであることには留意が必要であらう。日本政府向けに書かれた他の報告には日本の国益を優先する記述が見られ、さらに、柳田が委員会の会議の場でたびたび日本の都合を代弁する発言をしてひんしゅくを買つたということはよく知られている。

(11)——なお、当時の柳田が日本人の南方への移民に関心を抱いていたことについても確認しておく必要がある

う。上述のように、中農の養成のためには「労力配賦」が不可欠であった。その配賦先として柳田は渡欧以前、貴族院書記官長時代からオランダ領インドネシアに注目していた。したがって、当然のことながら日本の委任統治領であった太平洋の島々に対する柳田の視線には、移民先としての意識が多分に含まれていた。そのことは、委任統治委員辞任後の1924(大正13)年に『大阪朝日新聞』に掲載された講演要旨の「殊に尚多くの無住地未開地がある、其処には米を造り得るゝのである、土人の生活に対する理解と大なる利害関係を有する我日本はそれ等の未開地を開拓して米を造れば我人口増加の調節策としても宜しく日本将来の大問題であると共に白人には絶対に出来ないことであることを記憶せねばならぬ」という記述に明らかである〔柳田1924:179〕。ただし、こうした柳田の視線を、直接的に日本の帝国主義的膨張や植民地の人びとの抑圧と結びつけて考えることには慎重でなくてはならない。西洋人が幅を利かせるジュネーブでの経験は、柳田に太平洋の島々と沖縄と日本とを同じ小さな「島」として位置づけさせるに充分であったからである〔小熊1995:216〕。

(12)——柳田はタビという言葉の語源について「たべ(与へて下さい)といふ言葉から出てゐるやうに、旅人はもと農家の生活に直接ならざる有形無形の対価を供して、食物と交換しつゝ、生きて行つた人びとであつた」としている〔柳田1935:283〕。

(13)——いわゆる山村調査にともなうて用意された「郷土生活研究採集手帖」には100におよぶ質問項目が用意されていたが、その内容は調査年ごとに少しずつ増補が加えられている。

(14)——いわゆる山村調査・海村調査・離島調査のために用意された手帖については、これまでさまざまな活用が図られてきたが、それぞれの質問項目の意図についての検討は充分でなかったように思われる。

(15)——以上のような「手帖」の質問項目における意図については、「山村調査」の報告書である『山村生活の研究』の鈴木棠三の報告からも読み取ることができる〔鈴木1937〕。

(16)——1984年には『日本民俗文化体系』(小学館)の第六巻として「漂泊と定着一定住社会への道一」が刊行され、その著者代表を網野善彦がつとめていることも象徴的である。

(17)——その他の要因としては、非農業民や漂泊民の存在を柳田の山人論や被差別民論と結びつけて論じる

議論の展開が考えられる。本来であれば小稿においてその影響についても言及したいところではあるが、現在の筆者にはその準備がない。稿を改めて検証したい。(18)——当時、重出立証法の有効性を問ひ直す試みは、福田のみならず、桜井徳太郎や宮田登などによっても進められていた〔桜井1972, 宮田1975〕。

(19)——こうした福田の考え方に対しては岩本通弥による一連の批判がある〔岩本通2006〕。筆者はおおむね岩本の論旨に賛同するものであるが、小稿では福田の個別分析法と人の地域移動との関係についての議論に集中するため、福田・岩本論争には言及しない。

(20)——ただ、福田は近著において個別分析法がその「具体的な方法や手続き」が明確化されたものではなく、伝承母体という概念が個別分析法の欠を補う形で理解され、「一人歩き」する結果となったと述懐している〔福田2014:82-83〕。

(21)——ただし、福田による伝承母体すなわち社会集団の不変性の証明は行なわれていない。

(22)——こうした岩本や千葉による言及のほかにも、伝承母体を基礎とした個別分析法に対する疑義は多く提示された。たとえば、前節で取りあげた大塚民俗学会のシンポジウムの討論では、竹田且が「漂泊民のもつ伝承は本来在地性を伴っていないわけで、そうした特定の地域性の欠落した人々がはたして常民といえるかどうか」といった質問をしている。これは明らかに福田による議論を意識したものである。それに対して湯川洋司は「非常民=漂泊民と規定し、民俗学は常民を研究する学問だとしますと、漂泊民の研究は民俗学ではないという答えが出てくる」ことになるが、「この仮定のどこかが誤っている」とし、「民俗学の伝承母体といった時に、それがイコールムラというだけでなく、集団があって、集団として括られる民俗特色があると考えていったらどうだろうか」と回答している。討論の司会の宮本袈婆雄は、このシンポジウムの成果を「伝承母体としての村落—ムラとしてとらえていく場合には限界がある。それで人間の集団だとか職業だとかという部分でとらえなおしたらどうかという方向性が打ちだされた」とまとめているが〔大塚民俗学会1985:25-27〕、岩本が「方法的個人主義」と呼んだ「個人の役割や自律性」を重視する方法論への言及はみられず〔岩本通1980:77〕、伝承母体としての集団という枠組みからの脱却は図られていない。

参考文献

- 浅井 易 1999「近代とタビ〈旅〉—沖縄の人々の移動の研究への新たな視覚—」(『日本民俗学』220 日本民俗学会)
- 網野善彦 1984『日本中世の非農農民と天皇』岩波書店
- 網野善彦ほか 1984『漂泊と定着—一定住社会への道—』日本民俗文化大系6 小学館
- 井上鋭夫 1981『山の民・川の民—日本中世の生活と信仰—』平凡社
- 井上 孝 2001「わが国における生涯移動とその特性」(『人口問題研究』57-1 国立社会保障・人口問題研究所)
- 岩本通弥 1980「現代民俗学への方法論的転回」(千葉徳爾編『日本民俗風土論』弘文堂)
- 1993「地域性論としての文化の需要構造論」(『国立歴史民俗博物館研究報告』52 国立歴史民俗博物館)
- 2001「『民族』の認識と日本民俗学の形成—柳田國男の『自民族』理解の推移—」(篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』柏書房)
- 2006「戦後民俗学の認識論的変質と基層文化論—柳田葬制論の解釈を事例にして—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』132 国立歴史民俗博物館)
- 岩本由輝 1976『柳田國男の農政学』御茶の水書房
- 1983『続柳田國男—民俗学の終焉—』柏書房
- 1985『論争する柳田國男—農政学から民俗学への視座—』御茶の水書房
- 大塚民俗学会編 1984「昭和五九年度大塚民俗学会年会シンポジウム 民俗学における『非農農民』」(『民俗学評論』25 大塚民俗学会)
- 小熊英二 1995『単一民族神話の起源—「日本人」の自画像の系譜—』新曜社
- 柄谷行人 2014『遊動論—柳田國男と山人—』文芸春秋
- 川田 稔 1985『柳田國男の思想史的研究』未来社
- 1997『柳田國男—その生涯と思想—』吉川弘文館
- 桜井徳太郎 1972「『歴史民俗学』の構想—郷土における民俗像の史的復元—」(『信濃』24-8・9 信濃史学会)
- 1974「結核の原点—民俗学から追跡した小地域共同体構成のパラダイム—」(鶴見和子・市井三郎編『思想の冒険—社会と変化の新しいパラダイム—』筑摩書房)
- 桜田勝徳 1949「出漁者と漁業移住」(柳田國男編『海村生活の研究』日本民俗学会)
- 佐藤健二 1997「日本農民史」(『柳田國男全集』3 筑摩書房 1997 解題)
- 菅 豊 2001「自然をめぐる労働論からの民俗学批評」(『国立歴史民俗博物館研究報告』87 国立歴史民俗博物館)
- 鈴木棠三 1937「出稼の問題」(柳田國男編『山村生活の研究』民間伝承の会)
- 高取正男 1977「遁世・漂泊者の理解をめぐる」(原題)(『高取正男著作集』1 法蔵館 1982)
- 千葉徳爾 1985「ヒロシマに行く話—ムラびとの広域志向性—」(『日本民俗学』157 日本民俗学会)
- 坪井洋文 1982『稲を選んだ日本人—民俗的思考の世界—』未来社
- 鶴見和子 1977『漂泊と定住と—柳田國男の社会変動論—』筑摩書房
- 橋本鉄男 1979「漂泊生業者論への視角」(『日本民俗学』121 日本民俗学会)
- 福田アジオ 1984『日本民俗学方法序説—柳田國男と民俗学—』弘文堂
- 1992『柳田國男の民俗学』吉川弘文館
- 2014『現代日本の民俗学—ポスト柳田の五〇年—』吉川弘文館
- 藤井隆至 1995『柳田國男 経世済民の学』名古屋大学出版会
- 松田睦彦 2010a『人の移動の民俗学—タビ〈旅〉から見る生業と故郷』慶友社
- 2010b「柳田國男の『生業』研究をめぐる一考察」(『国立歴史民俗博物館研究報告』158 国立歴史民俗博物館)
- 2014「移動の日常性へのまなざし—『動』的人間観の獲得をめざして—」(門田岳久・室井康成編『〈人〉に向きあう民俗学』森話社)
- 宮田 登 1975「地域民俗学への道」(和歌森太郎編『日本文化史学への提言』弘文堂)
- 1983「総説—民俗学の新しい潮流—」(『日本民俗学』148 日本民俗学会)
- 宮本常一 1958「出稼ぎ」(『生業』郷土研究講座4 角川書店)
- 柳田國男 1904「中農養成策」(『柳田國男全集』23 筑摩書房 2006)
- 1905「農政学」(『柳田國男全集』1 筑摩書房 1999)
- 1906「田舎対都会の問題」『時代ト農政』所収(『柳田國男全集』2 筑摩書房 1997)
- 1922「国際連盟の発達」(『柳田國男全集』26 筑摩書房 2000)
-

-
- 1923 「委任統治領における原住民の福祉と発展」(岩本由輝訳:原題「The welfare and development of the natives in mandated territories」)(岩本由輝『もう一つの遠野物語』刀水書房 1983)
- 1924 「太平洋民族の将来」(『柳田國男全集』26 筑摩書房 2000)
- 1925 「日本農民史」(『柳田國男全集』3 筑摩書房 1997)
- 1928a 「青年と学問」(『柳田國男全集』4 筑摩書房 1998)
- 1928b 「附記」『時代ト農政』所収(『柳田國男全集』2 筑摩書房 1997)
- 1929 「都市と農村」(『柳田國男全集』4 筑摩書房 1998)
- 1931 「明治大正史世相篇」(『柳田國男全集』5 筑摩書房 1998)
- 1934 「民間伝承論」(『柳田國男全集』8 筑摩書房 1998)
- 1935 「郷土生活の研究法」(『柳田國男全集』8 筑摩書房 1998)

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2014年9月29日受付, 2015年1月26日審査終了)

An Analysis of the History of Folklore Studies on the Ordinarity of Inter-regional People Movements

MATSUDA Mutsuhiko

Regular population movements between regions and their impacts on lifestyle and culture are difficult topics for today's folklorists to address. In order to identify the causes of such difficulties, this paper examines the history of folklore studies. The end goal of this examination is to find clues as to how future folklore studies can address the issue.

The folklore studies systematized by Kunio Yanagita in the 1930s were derived from agro-politics. One of the major agro-political issues he was interested in was the development of medium-scale farmers. In order to increase their number, rural surplus labor needed to be reallocated. What was important there was the *issue of labor allocation* to make full use of rural surplus labor. This was a main focus of Yanagita in his research on agricultural policies. It was later absorbed by folklore studies while being transformed into the issue of impacts of population movements on rural life. Yanagita regarded population movements as a factor of social changes and examined the phenomenon to reveal changes in lifestyle.

His folklore studies, however, were criticized after his death, in the 1970s and 1980s, during which the issue of population movements was trivialized to the issues of "non-folks" and "non-farmers." The rise of a separate analysis method based on the assumption that there were communities that served as bases for transmitting tradition also marginalized the issue of population movements from folklore studies. This is why regular population movements are difficult topics for today's folklorists to deal with.

Now that we are living in a society where inter-regional population movements have become very common, it is essential for folklorists to recognize the above-mentioned historical context of folklore studies and incorporate the perspective of population movements into their studies.

Key words: Kunio Yanagita, *issue of labor allocation*, non-farmers, wanderers, separate analysis method